

ふるさと

講座



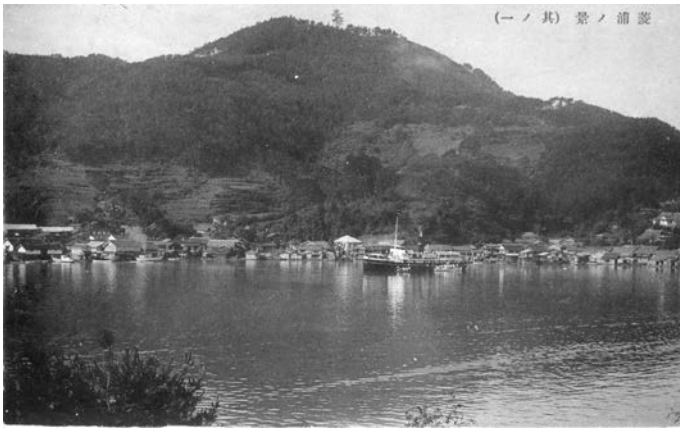
前号まで、深谷治文化財保護審議委員

によるジオパーク編を掲載してきましたが、今号より他の文化財保護審議委員や経験者による、各地区の歴史や伝説・特色ある伝統行事等を風土記として順次紹介することになりました。

引き続き「一読下さいますようお願いいたします。」

□菱浦編

家督山考



昭和初期の菱浦港と家督山

した地誌「隠州視聴合紀」には

岐国の国状を記

一六六八年
(寛文七年) 松江藩の隠岐郡代だった斎藤勘介が、隠岐国の国状を記

《福居村は西山の下左右に荒田が有り初めこの村を福頼と云っていた。そこに並ぶ家屋は荒屋ばかりで貧しかった。一人の年老いた祝(かんぬし)が村の名を改めて福居とした。それ以来ようやく人々が住み着くようになった。背後の山に一段と高くなった一峰がある。阿堂という。この山には通常人は登らない。登ると必ず異変があるという。山の麓を北に越えれば菱という小さな村がある。村に続いて菱野というところがある。ここから内海を船に乗って別府に渡る」と記され昔から菱と言われていたことがわかる。菱浦を現在でも年配の人が「ヒシ」と呼ぶのはその名残であろう。

「菱」とは、池や沼に生える水草で、茎は細長く泥水の中を成長するといふ。海岸の一部に砂州が発達して、僅かな沼が形成された所があり、そこが地名の由来となったのだろうか。

菱浦の海岸道路に沿う家屋の多くが、長い歳月をかけて人の手で埋め立てられ、その土地に築かれたものであることは周知の事である。地区の発展に尽力した先人達の労苦を思うと

頭がさがる思いがする。

さて、「隠州視聴合紀」に記す《背後

の山に一段と高くなった峰があり、阿堂という。この阿堂とは一体何を指すのか、それは家督山をいう。この時代には阿堂と呼ばれていたのである。アドの当て字として安曇と表記する地方もあり、滋賀県安曇川町を指摘できる。そして安曇という字は(あずみ)とも音読みされ、長野県の安曇野は有名な観光地でもある。更に奈良時代、天平三年の隠岐国正税帳には、海部郡(海士郡と改まるのは、村上家文書によると十五世紀中頃とされる)の役人の名に阿曇三雄と記されたのが見られる。

海部、安曇、阿曇という地名や名字は古代の海洋民である海人族に由来するといわれ、全国各地に分布している。アドドヤマを家督山と当てた文字は、どう考えても読めない文字であるが、一六六八年「隠州視聴合紀」に記す阿堂、そして一六八八年(貞享四年)に編まれた増補隠州記には、福井村に所在する神社の一事として「阿戸堂権現」が見られ、アド、アドドと変遷したことから理解できるのである。

北分にある角山は津の山の事である。津とは港をいい、航海中の舟は山を見てその場所が確認出来るのであり、諏訪湾の入り口に当たる角山は、海運業として隆盛を誇った村上家が拠点と

した北分、吉津の湊への入津の目印の山として役目を果たしたのだから。十五世紀中頃まで、海士を海部と書かれていた他の読みは、アマベとも読む。海部とは、古代のヤマト王朝に海産物を貢いだり、航海に携わる專業集団の民の事である。

奈良の都、平城京の跡からは、荷札に附ける木簡が多数出土し、海部からたくさんのお布などの海産物が送られた事がわかったが、中でも干しアワビや干し海鼠は、都の貴人達に珍重されたと考えられている。

古代海洋民に由来するアマやアドの地名、アド山といわれた家督山は、島前内海を航海する舟に、海部の民が住む島として認識された津の山であつたのだから。

《この山には通常人は登らない。登ると必ず異変があるという。》
この記事は何を意味するのだろうか。明治時代の神社合祀令により、家督山にある家督神社は、御倉神社に合祀されたが、その後、菱浦の里に良くないことが度々起こり、再びもとの場所に祀られるようになったという。

今年の家督神社の例大祭は、四月二十二日に行われ、晴天に恵まれて大勢の参拝者で賑わった。

註：内は現代語に改めました。
文化財保護審議委員 榊原信也